

# 人類の存続を賭けた 大変革時代の概観

農食健研究所

(株)医工学研究所

(株)人間と科学の研究所 所長

## 飛岡 健

〈はじめに〉

宗教、イデオロギー、民族、倫理、理性等々全てが変革期

読者の皆さんは気付いているだろうか？いや気付いている事と思う。

今日我々人類の住居空間であるこの宇宙船地球号の中では、人類のこれからの生存を模索する上で、今日地球上で行われている全ての制度、法、組織、そこでの考え方、行動の仕方、科学技術の在り方、経済活動の在り方等、諸々を抜本的に変えざるを得ない状況が発生している。その事の気付きが地球全体に広がらないと、地球の将来は危ういという事になる可能性が高いのだ！何が地球上での人類の生存を危うくす

原因があるのか？その原因が生じている理由を詳しく知らねばならない。

その原因の主たる一部を図1に示したが、これを解決せねば、今のままでは人類は世界的に葛藤、軋轢を更に強め、墜落し続け、自らが地球生態系のガンとなり、自らを死に向かわせる位に地球生態系を滅ぼす可能性が高い。確かに宇宙船地球号の乗組員の一部は、既にこの切迫した状況に気付き、それへの対応努力を鋭意開始しているが、大多数の宇宙船地球号の乗組員は何となく現状を肯定しないまでも、否定することなく生きていく。中には今のまま豊かさを享受し続けられると、あるいは更に物質的發展が出来ると考えている人も多い。だが図1の諸問題

を解決せねば、宇宙船地球号の将来は確実に危うい。しかし図1の全ての課題を本稿で語る訳には紙面の都合上いれない。ここでは「宗教」、「民主主義VS専制主義」、そして「資本主義VS共産主義」の3つを主として考察し、今日の問題点の本質を抜本的に明らかにし、読者諸氏との理解や認識を共通のものにしたいと思う。

何故ならば、この3つはホモサピエンスとしての人間の脳の生み出した考え方と、そのシステムと、その実践が今日の諸問題の根本原因だからである。今日の最大の課題は環境問題であ

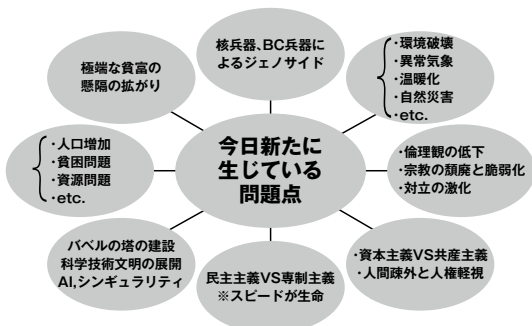


図1 今日新たに生じている問題点

り、これらの考え方の生み出した結果である。何と今日の地球の体温が計れるとすれば、40・5度の重体レベルなのである。あと1・5度で死を迎えてしまうのである。

そして環境問題と共に何よりも、憂うる事として今日の世界を襲っているのはひとりひとりの主体性の喪失、あるいは奪取であり、人権抑圧であり、貧富の懸隔の拡大である。そして現実に生じているテロや戦争である。究極的には人類の存続の可能性の弱まりである。おそらく、図1の諸原因の解決がなされないならば、近い将来この地球上でのそれらによる人類の生存は破滅的な事態を招くだろう。何故、ここまで厳しい状況を招いてしまったのであるのか？それにも拘わらず、有効な手立てを打てないのだろうか？それに答えねばならない。これに答えるには「人間の欲望のメカニズム」を明らかにし、その対処法を考え出さねばならない。

ところでこうした問題の本質にホモサピエンスとして、「人間の言葉を操る能力」にそもそもその問題の本質的、根本的原因があることは既に何回も述べて来た。限らない人間の欲望拡大も

ここに根差している。ここではその詳しい話しは省略し、その「言葉操る能力」が生み落とした3つのセットの問題についてここで少し根本的に論じていく。

その作業を進めていく前に、そもそもそれらの考え方を地球上の誰が生み出し、利用し、誰が自分達の利益を稼ぎ出しているのかを知っておくことが大事である。一言で語れば、今日の世界の富の90数%を所有し、世界の政治を200〜300年間に渡って支配してきたユダヤ系金融資本(DS)である。その実動組織としてフリーメイソンがあるが、これを隠れ裏にしているのがDSである。注意を要するかは、今日この話しは「都市伝説」というジャンルに葬り去られ、まともにその内容が議論されないように世論操作されている事である。

特に彼らは、第2次産業革命の成果を巧みに取り込み、産業界を支配すると共に、新しく世界支配の為の手段としての金融システムを作り出し、中央銀行とその傘下の銀行や他の金融システムを構築所有し、強欲資本主義を展開し、世界の富の一極集中をデザインする事に成功したのであった。

その彼らが作り上げた考え方、あるいはイデオロギーが、「資本主義VS共産主義」であり、「民主主義VS専制主義」であり「完全自由市場VS管理市場」であった。と同時に宗教を植民地支配の手段として使ったのであった。

ここでは、これらの言葉やその実体を実際に、今日社会でどういう働きをしているのかを、論じる事にする。

## (1) 全ての道はローマに通じる (A i i e W e g e z u m R o m e)

今日の地球社会の重要な諸問題の発生原因は、ホモサピエンスの誕生から存在していたが、主として第2次産業(動力)革命以降のユダヤ系金融資本の身勝手な振る舞いに主として起因する。そして、その事態を招いた原因は更にもっと時代を遡ることになる。

ハッキリと歴史的につかめるのは、生存環境の厳しいヨーロッパの地で生存競争に多くの原因が根差している事である。その生存の為にヨーロッパの地において、激しい戦いを繰り返して来た白人達の営為に、今日の諸々の

問題が根差している。その中でも、今日の地球上で生じている問題にとつていちばん注目するべきは、「全ての道はローマに通ずる」とまで言われたローマ帝国の興隆と彼らが行った事である。例えば今日の異端宗教闘争としての「キリスト教VSユダヤ教」、そして更に「キリスト教VSイスラム教」の戦いに今日の地球社会の混乱の原因がかなり深く根差しているのだ。何故か？

既に「ローマ研究」は世界的に広く行なわれ、生態学中観のオスヴァルト・シュベングラー氏の『西洋の没落』や日本人でイタリアの歴史を繙く塩野七生氏による『ローマ人の物語』等々世界には限りなくある。ローマは驚く程に研究され、考察され、描写されてきた。それ程に世界史におけるローマ帝国の存在は大きな事実であった。それでもまだ完全に裸にされたとは言いがたく、未だ新説の登場の余地がある位である。多くは今までの支配者の立場からの解放から成り立っているからである。

更にその内容となる考え方の背景には、ギリシヤの文明文化が強く影響している。ここではその点には触れない

が、一度ギリシヤ神話の内容の凄まじさをしっかりと解読しておくことである。日本の神話とは全く違うのだ。

そうした中でも何よりも、我々が今日の地球上の問題を考える上で、ローマ人の行ったことの中で取り上げるべきは次の3点である。

1. ローマの激しい武力による世界征服と敗者の奴隷化の図式
2. キリスト教の国教化とユダヤ教とユダヤ人の迫害(ディアスポラ)
3. ローマの東西への分裂と西ローマ帝国の滅亡と、滅亡の原因としての環境破壊による国の衰退と、ゲルマン民族の南下による分裂、崩壊(東ローマ帝国のみ残りハプスブルク王朝を生み出した)

さてローマ帝国の東西への分裂と共に、ヨーロッパは春秋の時代に入り、西ローマ帝国が滅びヨーロッパは再び小国に分裂し、激しい小国間の戦いの歴史が近代まで繰り返され、多くの人種、民族の殺し合いが展開されていった。キリスト教中心の、暗黒の中世と言われている由縁である。まさにローマ軍の版図の拡大の為の激しい戦いの如くであった。あるいはその延長としての植民地主義への展開の如く、

アフリカ、南アメリカ、中東、アジアの大半を植民地化したのであった。但しロシアと日本はその中に入らなかつた。それが、仮に日本にとつての1つの問題をなした。

そしてローマのキリスト教の国教化とユダヤ人とユダヤ教の迫害は、その後のナチスのユダヤ人大虐殺の歴史を生じる遠因となつた。しかし他方でそうした迫害や弾圧にも拘わらず、ユダヤ人は今日に至るまで金融の社会支配者となつたのであつた。更にそれに伴つて政治が形成された。その実権の奪取が生じ、今日の地球の陰の支配者としてのディープステイツ(DS)の中核にユダヤ系金融資本家の面々があつてゐる。但し彼らは自身が支配者として表に登場する事は少なく、殆どの代理人が表で、その裏で彼らが手綱を引いてゐたし、今日もそうである。そしてそれが2度の大戦と2度の産業革命の流れに乗り大展開し、今日の世界中の富の90%を握つてゐると言われている。大変な貧富の懸隔を生むと同時に人間疎外を厳しいものとしてゐる。

またキリスト教という一神教は、そもそも十字軍の遠征やイエズス会の動

きに見られる如く、世界のキリスト教化と植民地を狙う意図が内包され、実際にローマカトリックが中世ヨーロッパを支配し、更にその輪を世界に広げ、世界の富と権力を集め、未だ世界一の宗教人口(十数億人)を誇つてゐる。そしてその歴史の中に、その主旨と反して実に多くの戦いの考え方を生み出し、実際に戦いを行つてきたのである。

## (2) プロテスタントの倫理から資本主義の精神への発展

そしてそのキリスト教自身の中に分裂が生じ、プロテスタントを生み落として、そのプロテスタントの倫理が資本主義の精神を生み落とした事が、マックス・ヴェーバー氏による『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』の中で描かれてゐる。そこでは今日の資本主義とは異なる視点が論じられてゐるが、しかし歪んだ資本主義を生み出した原点には違ひないのだ。

更にキリスト教の一神教としての普及啓蒙活動は、共産主義への道をも生み出した。資本主義の発展の最終段階が帝国主義であり、更に共産主義にた

どり着く道をMarx & Engels(マルクスとエンゲルス)が示したのであつた。1989年のドイツを東西に分けていたブランデンブルク門の破壊と、ソ連の崩壊により「共産主義は死んだ!」と一度は叫ばれたが、今日再び共産主義は、様々に形を変えて、地球上に拡がっているし、力強さも増している。そして、地球の環境を破壊している。

## (3) キリスト教と資本主義と共同活動としての植民地主義

我々が今日地球上での人類の生存環境を危うくしている最大の原因の1つは、この一神教であるキリスト教の歪んだ形での活動の歴史である。そしてその考えの持つ布教活動の攻撃性と、資本主義的市場拡大の為の植民地主義とが軌を1つにして、その活動をこの地球上で非人間的に広めていつたのであつた。何故拡がったのか。

当時の世界の多くの非ヨーロッパ国の人々のアニミズム的に、漠とした素朴な神信仰や原始宗教に浸つていたところに、明確な神の存在を示し、その福音を伝える事によつて、キリスト教

信者に変え、明確に神に仕える御子に仕立て上げ、それに従わない時には、軍事的に恫喝して、強制的に盲目的に従わざるを得ない形で、信者に仕立て上げていったからである。そして人々を信仰と労働とに限定した生活を強制するようになった。神の下僕として多くの植民地の人々を信者とすると共に労働者にし、彼らに厳しい労働を担わせたのであつた。

しかも、そうした植民地の生み出す富の多くは、宗主国に還流させられ、ヨーロッパの教会や貴族社会を潤していたのであつた。そして多くの植民地の侵略者の居住生活地は、その地の良い場所をヨーロッパ的街並みに造り変え、現地の自然の中でその姿を屹立する形でそびえるのが常だつた。何とブラジルのマナウスの奥地にまで西洋の国の街並みと、その中にオペラハウス、カジノを自分達の快樂の場として作り出してゐた。

またフランスのベトナムのホーチミン(旧サイゴン)やイギリスの香港の街並み造りを見ても、元々の自然を破壊し、まさにヨーロッパ風の威風堂々の建築物が居並ぶ光景なのである。少なくとも比較的近代まで、ヨー

ロッパの人々は厳しい自然の中で、「自然は悪魔の棲家であり、悪の根源」と考え、その自然と対峙して神の住む街へ造り変える事が、彼らの活動を支える論理となっていたのである。要は

ヨーロッパの白人達にとって都合の良い神であり、自然観であり、宇宙観なのであった。そして嘗為なのであった。乱暴な言い方をすれば、ヨーロッパ人自身が、神の分身としての選民であり、他の民族を下僕として支配する形で、自らの活動を強めていったのであった。それが今日までの歴史を形成してきた。しかし、それに染まらないで素朴に生きて来た人々は、沢山地球上に残っている。

そしてこのキリスト教精神は、植民地においては自分達が神の如く上の立場であり、下僕としての弱い立場の民へ慈しみをかけなさいという風に、当時の植民地での状況は捉えられるのである。実際には、植民地化により、宗主国が植民地の人々を弱者としていたのだが、明らかにそこには上下の階級の存在を認知している。元々の神の教えはそうであったかは判らないが、クリスチャンの実際に行ってきた行いは、上で述べた如く、明確に神と下僕

としての人間の縦の関係そのものなのであった。

## (4) 資本主義の強欲さ

ヨーロッパの列強の資本家達(多くは貴族や王族)の強欲さを見ていこう。彼らは更なる栄耀華美な生活を求めて、その活動は海を越えて、世界に植民地を求めて版図を拡大していった。

1600年にイギリスに東インド会社が出来たが、これは明らかに1人の資本家の事業としては荒海を超えて、市場開拓や原材調達、更には植民地構築を試みる事は危険性が大き過ぎた。そこで、資本家達が集まってシンジケートを組む事によって、その危険性を分散する事がなされた。その時の権利証書が今日の株式(Stock)となった事は承知の通りである。

そのようにリスクが分散される事によって、資本家達の投資意欲は更に強欲となり拡大し、更なる版図の拡大即ち市場と生産地を求めて植民地を増やしていったのである。何よりも資本主義とは、資本の運用の場としてのマーケット(市場)と不可分であり、いかにマーケットを拡大し、発達させ、そこで搾取していくか、それが強欲資

本家達の主要な関心事であった。

自国のマーケットが飽和すると、他国にマーケットを求め、そこも活動が飽和するとバブルを生じさせたり、崩壊させたりして稼ぎ、更にはそれらを飽和すると次には戦争を生ぜしめ戦争経済によって稼ぎまくるのであった。その中核にいたのが、ロスチャイルドを始めとするユダヤ系金融資本家達である。何の為にここまで彼らはやるのか?その一つの答えはこの地球上でユダヤ人が安心して生きていける為のイリミナティを考え出した。「ユダヤ帝国の建設」であろう。ここではこの点は詳しく触れない。私の別の稿を参照して欲しい。

## (5) 第2次産業革命の発生とその利用

さてヨーロッパ白人社会は、資本という富の拡大の為に、植民地を求めて世界各地に展開し始めた頃、ヨーロッパ国内は小国乱立の時代であり、統一国家が出来たのは、ドイツが1871年、イタリアが1861年、フランスが1848年、イギリスが1707年、スペインが1479年、オランダが1581年であり、それまではドイツなど300程の小国乱立の戦国時代であった。ヨーロッパ各地で戦いが消えず、しかも小国なのでその戦いに傭兵を雇い入れ戦ったので、その戦いは凄惨であり、負けた国の国民は、隅においやられ、散々いたぶられたり、犯された上で、財産は没収され、奴隷的立場に追いやられるのが常であった。これを世界に拡大しているのがそれ以降の歴史である。

しかし皮肉にも「必要は発明の母」であり、激しい戦いは強い武器と産業を求め、その為にエネルギーと資源の開発に鋭意エネルギーを費やしたのであった。それ故、産業がいち早く育ち、強力な武器や装備が生まれる事になった。その頃最も強力になっていったのはバイキングの子孫でさんざん人身売買を行なって稼いだイギリスで、そこで蒸気機関が改良(J/Watt)され、実用に供され、紡績機、自動車、蒸気船、蒸気機関車等々が続々と生まれ、陸海の移動と生産能力を大きく拡大した。

そして航海能力が高まる事によってキリスト教教師と兵隊、そして生物学者や技術者を外国や国内の僻地に移動

させる事に多大に寄与し、それまで少しずつ進んでいた植民地化を一気に拡大し、イギリス国内の活動が、その当時の他の国より一層産業化し、第2次産業革命と呼ばれる程になり、そこに資本家足りうる貪欲なブルジョワジー階級が誕生したのであった。と同時にイギリス人の多くが、ロイヤルファミリーを始めとして、フリーメイソンになったのである。

そうした産業活動が、ヨーロッパ中に拡がり、ヨーロッパ諸国が近代文明の恩恵をいち早く享受する国々となったのである。そしてヨーロッパの国々の多くが宗主国として植民地を競争して広げ彼らの論理と、文明文化を押しつけていった。その最たる国が、英仏、蘭、スペイン、ポルトガルであった。その中でも英国は、今日でも大英帝国連邦54カ国の盟主であり、圧倒的に植民地化を進め、18〜19世紀の間、パックス・ブリタニカとして栄えたのであった。その頃にイギリスが世界各地から収奪した富は膨大であり、今日の英国のGDPの100〜200倍をストックとして所有していると推測されている。そうした状況下で、1つの帝国を形成する位の力を有するファ

ミリーが登場する事になる。それがドイツのフランクフルトのゲットーで出現したユダヤ人のロスチャイルド家である。何故、ロスチャイルド家が伸び巨大となったのか、その秘密は次の如くである。

ロスチャイルド家は、5人の子供に当時の王族や貴族の子弟に行っていた教育を十二分に授け、ヨーロッパの王侯貴族との関係を巧みに深めると共に、当時は奴隷の学問とされ、上流の支配者階級が学ばなかった工学を身に付けさせ、当時の工業の著しい発展を自らの手中にするべく資質を磨き、当時急速に発展していく分野に勉強した工業の知識を用いて進出し、多くの産業を生み出し、あるいは買収し、傘下の企業を大きくしていった。更に金融支配のシステムを様々に開発する事に成功し、中央銀行支配の体制を構築し、経済上の実権を握り、巧みに世界経済と政治を動かす、時代の覇者に静かに潜行しつづなっていた。そしてその立場を守るべく英国のM1〜5やM1〜6という情報機関を生み出していった。

そのロスチャイルドは、その政治活動を隠す為に、初代ロスチャイルドが

創立したイルミナティのメンバーを当時急速に拡大しつづあったフリーメイソンに巧みに入れさせ、それを隠れ蓑として活用して、世界支配の努力を拡大していき、イギリスのみか、フランス、オランダ、ベルギー、ドイツ、オーストリア等々ヨーロッパ諸国に根を張り、更にアメリカや東南アジア、アフリカ、更には南アメリカ等々まで、その勢力圏を広げていく事に成功したのであった。それが90%の世界の富の支配の実情なのである。

結果として、今日の地球社会の政治経済のかなりの部分が本来は自由・平等・博愛を求めていたフリーメイソンをより政治的組織にして活用したユダヤ系金融資本が支配している。それに対し、アンチD Sの動きが一部出ているが、その内容と成果は未知数である。アンチD Sの戦略目標は明らかに正しいが、その目標を達成する為の戦略戦術を立案して、実行する事は生半可では出来ない。

上述の如く、いち早くヨーロッパの地で、特にイギリスで、いち早く産業革命が生じ、18〜19世紀がパックス・ブリタニカになった理由を述べてきたが、それを纏めたものが、**図2**である。

元々南アフリカのタンザニア地方に出現したと考えられている人類が、約30億年前にホモサピエンスとなり、約5〜6万年前から、アフリカを北進し、チグリス、ユーフラテス川流域に到達し、更にそこから東西へ分かれ散らばり、世界各地に広がっていったとされる(この説には異論もある。同時発生説)。

そして中東地域で文明の発展と人口の増加を見た後、更にヨーロッパ側とインド側へと分かれて展開していったとする考え方である。比較的早くから、ヨーロッパの地に住みつき、そこで激しい民族間、地域社会間の闘争を自らの生存の為に繰り返す、その中で前述の如く、科学技術をいち早く発展させていったのがヨーロッパの白人社会であった。何よりもそこには地理学的、地政学的に、エーゲ海、地中海、カスピ海、黒海等の海と湖が存在していた事が大きく働いている。

ここでは、何故ヨーロッパの地で科学技術がいち早く花咲いて、その活用により世界の覇者になり得た事の説明は、これ以上行わないが、少なくとも今日の世界を支配しているユダヤ系金融資本の勢力拡大の天の時は、ちよう

ど第2次産業革命を迎えた事であり、それを活かす能力を身に付けていた事である。

但し、我々は余り認識していないが、そのヨーロッパの科学技術の興隆の前に中東諸国の中で、かなりのレベルの科学技術の進歩があり、それらがヨーロッパ科学技術文明の素材や栄養分となっていた事は紛れもない事実である。ヨーロッパの多くがゴシック様式の寺院であるが、これなども源流は中東地域にあるのだ。ヴェニスやサンマルコ寺院も、セピリアのキャテドラル

今日世間一般の常識として『民主主義(Democracy)』という政治システムが、多くの地球社会で大手を振って罷り通っている。そのシステムの本質は、民意を中心として意志決定における拙速を避ける事であった。多くの人の考えを採用するので、専制政治(Autocracy)や封建主義(Feudalism)や独裁

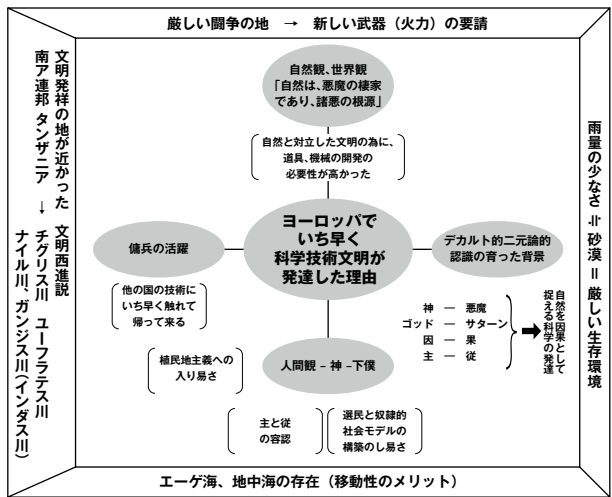


図2 ヨーロッパでいち早く科学技術文明が発達した理由

ルも、元々は、イスラムが建設した建造物なのである。

即ち、イギリスを中心としてヨーロッパで栄えた第2次産業革命の工業技術の源流は中東にあつたが、それらを巧みに導入して、自らの力の源泉にいち早くしたのが、中世ヨーロッパであり、それが花開いたのが、18世紀のヨーロッパと言えるのである。

政治(Dictatorship)や絶対主義(Absolutism)等々の政治システムより、最終的に大多数の人を幸せにするのに優れているとの判断が少なくとも近年まで存在していた。しかし、それが揺らいで来たのが今日である。今日この地球上では、その民主主義を守るという側と、早い社会変化に効果的に対応し得るという専制政治体制をとる側とが激しく対峙するようになって来ている。

民主主義の良さは、上述の如く何よりも多くの人々の判断を採用して、拙速を避ける事にあり、民意を少数派も含めて尊重し、国民の主体的自由を守るといふ建前にあつた。それに対し専制政治体制は、指導者(専制者)次第であり、一端怪しい人物がリーダーとなると、その国を誤つた方向に導いてしまう可能性がひそんでいる。しかし政治のスピードと政策の実効性は優れていると判断されている。まさに双方がメリットとデメリットを内包しているのだ。そのメリットとデメリットとのバランスが変化し始めていることが、今日の加速度的変化を遂げているグ

ローバル社会なのである。

そこでこれらの2つのイデオロギーの成長衰退と、メリットデメリットを少し詳しく見ていこう。明らかに現実的にはこの地球上での人類の生存の存続にとって両陣営共に問題を生み出している。

今までは18〜19世紀のバックス・ブリタニカと、20世紀のバックス・アメリカナが、この地球社会の中心で

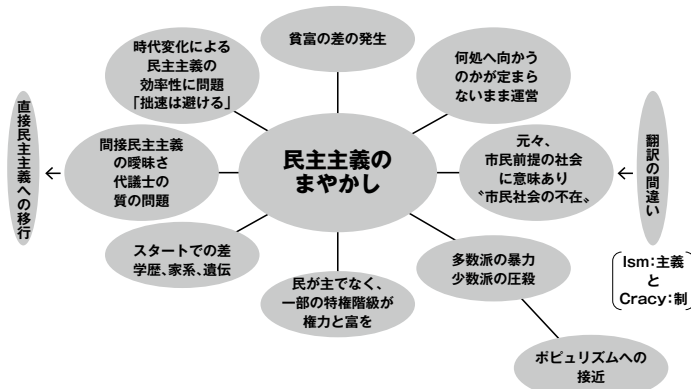


図3 民主主義のまやかし

あったが、ここで論じている問題を生み出した。他方、明らかに時代は21世紀においては、バックスXへシフトし始めている。Xはまだ確定していないが、大方は文明西進説の如く中国がその候補に挙げられている。しかし、現状のままでは問題が多いし、大き過ぎる。

明らかに今日は大転換期であり、過渡期である。そこでは次第に、欧米の力が相対的に弱まり、中露を中核としたBRICsが力を増すと共に、新興のグローバルサウスが力を付け、第三極となりつつある。しかも時代は超加速度変化の時代であり、ここでは諸々が指数的関数変化を示している。図4に示した如く、3つの距離の概念は、3つの産業革命の進展により、重要性を弱め、次の第4次産業革命（脳業）の到来により、情報のいち早い収集により情報の巨大な集積とスピーディーな解析処理とが時代的に重要になっている。更に過去のデータの収集と分析からの知見では、早い時代展開に追いつかない局面も登場している。

そうした中で、既に見て来た如く民主主義VS専制主義、資本主義や共産主義や自由主義VS共産主義の二項対

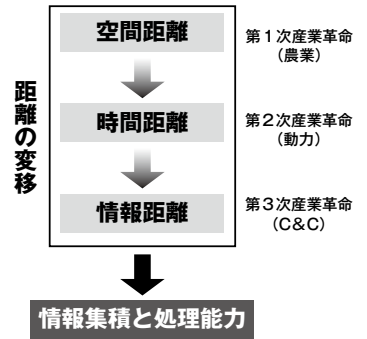


図4 3つの距離の概念

立的捉え方に疑問が呈せられ、新しいイデオロギーや国家の政治体制、あるいは産業経済の在り方が問われ始めている。

まず民主主義である。そもそもDemocracyの訳そのものが間違っているとの考え方がある。それは「Cracy」が本来は理念を指す言葉であり、主義と訳されるのは間違っているとの考え方である。

本来「民主理念」とするならば「常に民が社会の主人公である為に、自ら血と汗と涙を流し、頭を絞る、社会を成立する為に税金を払い、いざという戦いの時に自ら武器をとって闘う人々が、真剣に論じた上で、多数決で物事を決定していく」のが民主主義であり、その主義に立脚した社会が民主社会であり、「常に時代に合わせ

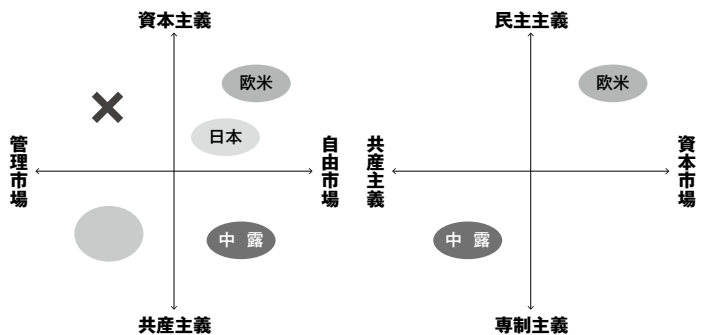


図5

て変化を遂げていく理念を宿した社会」と定義するが、正しい事になる。

しかし今日の民主主義とは、一部の富と権力を握った階級が、「お前たち労働者や奴隷の声をきいてやっつけるし、多数決で決めてるので、お前達が主人公だろう！」と声高に叫んでいるように響いてくるのである。実際には、民主主義の大義名分の下には、実は殆どの一般大衆としての国民は奴

隷の如く働かされている。元々気付かないように洗脳されてしまっているのが気付かないのである。その意味で「民主主義」という言葉は体制側の「方便」である。

それにも拘わらず、今日のウクライナ戦争においても「民主主義陣営を守るための戦い」の如きまやかしの表現によって、戦いは欧米等々により支援され、実際にはどっちが勝っても敗けても産軍学合同体が巨大な儲けを生むように仕組まれているのである。「本来の民主主義の理念」は正しくしても、その運用方法の中に別の意図が入り込む余地があるのであり、実際に今日の民主主義は上述の如く一部権力により都合の良いように操作されている。

他方、専制主義体制国家は、中国のように少なくとも物質的成長には、その意志の決定の速さと強制的実施力を有しているので効果的である。しかし他方で監視カメラや人々相互の監視を取り込んだ厳しい統制社会で人権を無視し、他人の知的財産を平気で盗んだり、無断で活用する事を行っているし、実際に実行してきている。また専制者が私欲と私腹をこやし、社会の発展を

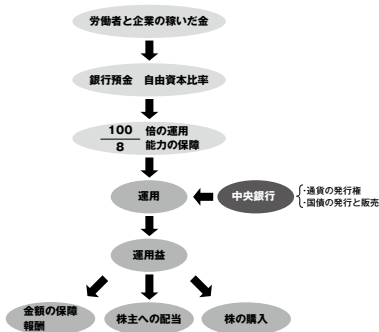


図6

妨げる事をし、社会全体として停滞している国々がかなりの数存在している。しかし、SNSの大衆的普及が人々を賢くし、その結果、反体制運動が活発化し、地球社会全体が不安定している。

少なくとも今日の物質文明の展開のスピードと効率を考えると、必ずしも民主主義の方が好ましいシステムとは言い切れないし、専制主義の方が効果的な側面もある。

しかし本当に人間が、人間らしく生きていく上で、これ以上の物質やエネルギー消費をして生きていく事は難しい、今日地球上で行われている民主主義も専制主義も、どちらも誕生の時の原義の正しさは別として今日では、真に人間に奉仕する機能を果たして

ない。明らかに別のシステムや制度の創造と構築が望まれるのである。

**(7) 自由市場という虚構**  
**資本主義 VS 共産主義**

今日世界の富の90%を握っていると言われるユダヤ系金融資本の資産形成の源は、資本の増幅を図る場としての「自由市場の存在」であり、そこでの産業システムの寡占と「金融システムの掌握支配」であった。中央銀行を民営化して持ち、その傘下に金融業を束ねる事によって、巨大な資産形成を可能とした。その自由市場で資本を自由に活用して資本を自己増殖させる機能を持つシステムが資本主義である。

本来、自由取引によって人々は競争しながら成長していくし、労働者は賃金を増していけるとの仮定であった。しかし、今日の状況は全くそうならない。

まさに資本主義と自由市場との結びつきで、実際に儲けるのは一方的に資本家達であり、労働者はその一部の分け前を与えられているに過ぎない。それでいながら、自由が保障されている民主主義の下で生きていくと教え込ま

れている。

まさにミルトン・フリードマンを始めとする新自由主義は、この自由市場と資本家の儲けを裏付けるセオリーとして機能していたし、多くの御用経済学者がそうであったし、多くの御用学者の立場もそうした御用学者の立場であった。

いずれにしても、資本主義と自由市場とは人間社会に著しい貧富の懸隔と人間疎外と、一部の勢力を経済的独裁者や政治権力者に仕立て上げてしまいかつ厳しい環境問題を招いてしまっている。

他方、共産主義は本来なら定義によれば自由市場は存在しない筈であるが、中国を始めとした共産国家は、国内的にも国際的にも、社会主義的管理市場と、民主主義自由市場とを巧みに使い分け、共産国家の政治経済システムの便宜的イデオロギーの元に運営を行っている。

その結果、社会主義や共産主義の本来の平等性

## 成功力=

- ①志力
- ②察力
- ③企力
- ④行力
- ⑤願力
- ⑥体力
- ⑦気力
- ⑧知力
- ⑨運力
- ⑩徳力

図7 成功力には、100の力

ならず、中国を始めとした共産国家は、国内的にも国際的にも、社会主義的管理市場と、民主主義自由市場とを巧みに使い分け、共産国家の政治経済システムの便宜的イデオロギーの元に運営を行っている。

その結果、社会主義や共産主義の本来の平等性

は薄れ、極端な貧富の差を形成する歪んだ形態の国家を形成してしまっている。ひよっとすると今日の世界でいけばんの金持ちは、プーチンと習近平かも知れない。自らの政治的権力で、経済利権を自分の配下に配り、その彼らが何らかの形で、その儲けのかなりを自分達に権利をくれた親分に献上しているからである。

注意すべきは、こうした対立激化の中で、様々な流通形態としてのサブライチェーンの変更に生じている事である。全体経済の共の成長よりも、資源国のみが資源の戦争戦略の下に栄えるように動き始めている事である。

## (8) 覇権争いの行く末

これからの時代は、一体どの国が世界の覇権を握るのか？

おそらくここからしばらくの間は、次の考え方の争いが劇的になされるであろう。

こうした中で、諸々が大変革を遂げていくのがこれからの時代である。そこで生き抜くには求められるのは「変化への対応力」である。何よりも「どのような変化があっても構わない」との柔軟な心境の確立であろう。



- 資本主義 VS 共産主義
- 自由市場 VS 管理市場
- 民主主義 VS 専制主義
- 文明拡大 VS 文明縮小
- 文明(物質) VS 文化(精神)
- 人類 VS 自然
- 神 VS 人間
- 人間 VS AI
- 宗教 VS 非宗教
- 民族間の対立
- 先進国 VS 発展途上国+後進国
- Oetc.

二項対立のチャート

全ての国や社会が権利を強く主張し、僅かの義務を果さねばと思っている程度である。

**(9) 人間の思考の限界は二項対立の図式の採用にあるのだが？**

そもそも「権利と義務」という二項対立の図式そのものが、問題を定式化する上で間違っていて、もつと別の立場があるかも知れないとの懐疑が襲ってくる。やはり神とその下僕としての

人間あるいは神(ゴッド)

と悪魔(サタン)とい

う二項対立の図式を始め

として、今まで見てきた

ように、その図式は、人

間の行う活動の至るところで、その鎌首をもたげ

ているようだ。何故か？

それは人間の脳の仕組み

と関係するようだ。人

間の脳は基本的には、二

分割と三分割の組み合わせ

で全てを認識出来るよ

うになっている。即ち二

進法とは(1)(0)と

を用いた3つの要素、即

ち「1or0」の「10」の部分と「2

or1+1」の根とnのべき乗の3つの

構成要素と表現されるものであり、全

ての数をそれだけで表現出来るのであ

る。今日のデジタル化は、まさにこの

$$\bigcirc = \left(\frac{1}{0}\right) \times 2^0 + \left(\frac{1}{0}\right) \times 2^1 + \left(\frac{1}{0}\right) \times 2^2 + \dots + \left(\frac{1}{0}\right) \times 2^n$$

$$2=1+1$$

それ故人間の脳は、2分割する事が、ベースであり、それを外化して、世界を見る時には過去と現在と未来、気体と液体と固体、cmとgとsec.の如くに3分割して認識するようになって

なかなかそのメカニズムから人間の思考は抜け出られないからこそ、今日の厳しい状況を迎えているのかも知れない。

しかし今日の量子コンピュータは、

そうした「0:1」のフォンノイマン

型のモデルから、量子のもつれを利用

した別の次元のモデルを思考原理とし

て導入しており、それをする事が出来

るならば、「0:1」の原理から離れた

新しい社会システムの原理を見出す事

が出来るのかも知れない。

いずれにしても、今日の地球上での

人類の文明化、文化化の展開はここで

論じた如く、言葉を操り二項対立概念

をベースとして展開してきた。

その結果が、人間の生存が消滅かの瀬戸際の状況を招いているのである。新しい思考原理の導入が不可欠である。おそらくそれには東洋の英(叡)智が必要となるだろう。

**(9) 大変革はどうなるのか？**

本論においては「今日という時代は大変革の時代である」との認識の下に、何よりも環境破壊と人間性の破壊を招いている。「民主主義VS独裁主義」、「資本主義VS共産主義」、「自由市場VS管理市場」等々、「宗教」という

二項対立の図式を問題として論じてき

たが、果たしてこれからの二項対立は

どのような変革を遂げていくのであ

ろうか？」考えられるシナリオは3つ

である。

シナリオA:全く何も変わらない

シナリオB:少しずつ修正されていく

シナリオC:一気に変革する

第1のシナリオAは今日の状況は殆

ど何も変わらないで、やはりユダヤ系

金融資本の築き上げた今日の政治、経

済システムが今まで通りに機能して、

多くの人々は彼らの搾取の下で、僅か

出している国や社会は無い。

しかし同時に「権利と義務」の問題

が強まっている。本来それらは人間社

会において表裏一体であり、権利に匹

敵する義務も遵守せねばならない。そ

れ故に権利と義務とを、どのようにバ

の分け前しか与えられず、一部の利権者の意のままに働かされてしまうというシナリオである。このままいくと、バベルの塔は、神を見通すまで高くなり、いずれ神の怒りを買ひ、取り潰される運命を迎えるのであろう。即ち、地球上での人類の存続は難しくなる。

第2のシナリオBは、現状を少しずつ変革していくシナリオである。問題は、この少しずつの変革が量的に増大して、質的転換を招き今日の諸問題が解決するようになるまで、地球が持つかどうかである。

第3のシナリオCは、今日地球上の一部の人々（例えばトランプ元大統領）がアンチDSを目標に社会を変革しようとしているが、トランプ氏達は「環境問題は無い！」との認識を持っており、次期大統領選に勝利したら、再び「America First」を掲げ、環境負荷を強い形で与える形で産業復興に邁進するだろう。

そう考えると、今日を根本的にここで述べた問題を解決する形の変革に取り組む動きは今のところ無い。アンチDSの動きはあっても、アンチ科学技術文明の動きは無いのが実情だ  
という事は、ここでの現実的に選択

出来る結論は結局シナリオBとなり、地球環境の破壊を、少しづつでも抑え、何とかシステムを維持しつつ、どこかの段階で今日の矛盾を解決して一段と高い安定した社会をこの地球上で構築しようとの動きである。

それこそ、Qアノン達が語っているように、人間よりも優れた宇宙人が地球に到来し、新しい地球上での人類の生活をリセットし、リクリエーションしてくれるならば有難いのであるが、残念ながら私は、宇宙人はこの広い宇宙の中のどこかでの存在、可能性は認めるが、今現在宇宙人はいて、地球に来ているとの説は容認出来ないで、その考えで考える事はしない。ということは大変革の時代」と言いながら、それが必要であると言いつつも、現状は大きく変わらないものと認識せざるを得ないのである。

今日人々が「大変革」という言葉を用いるのは、次のような内容に対してである。

## 〈おわりに〉 何を大変革すべきなのか？

- 量子コンピュータシステムの発達
- AIの普及と問題点の強まり、（AIが神へ）
- SNS等による人々のC&C能力の向上

### グローバル化の進展

- Pax XのXの内容のシフト（ヨーロッパ、アメリカがイタリヤへ）

- 金融システムの変化（DX化、ブロックチェーン等々）

### ○環境問題の強まりと対応

### ○自動運転の車やドローン

### ○アメリカ一極支配から、多極化

- シンギュラリティの到来（人智を超えて）

### ○e.t.c.（IoT、脳業社会の到来等々）

確かに、こうした「科学技術の加速度的展開」に伴う社会と、そこでの人々の活動、そのものは大きく変革されていくし、実際変革が大変な勢いで始まっている。

しかし、ここでも論じた如く、社会システム自体のインフラやその考え、そのものは余り変化していない

く、むしろ一部の国や人々が世界を動かす、多くの人々の生活そのものを非人間的傾向にドライブしているのだから。本来その大変革こそが戦略目標なのであるが！

果たして、その点の大変革は前節で論じた如く、結局シナリオBの少しずつ変革に落ち着いてしまい、結果として、何処まで地球上での人類の活動を、地球自体が容認出来るか、即ち人類の活動に対しての地球のストレスレジリエンスの強さが問題となるのである。

今日の地球人は、このレジリエンスを大きいと認めたい人と、問題がありそうだけれども、何とかなるだろうとの安易な考えの下に、不安を抱きつつも、何となく現状を過こしている人々に別れるがその両者が圧倒的多数である。

ということは「地球のレジリエンスが、人間がもつと賢くなるまで持つかどうか」の「賭け事」になり下がってしまったという事を物語っている。果たして人類は、この「賭け事」に勝つか、負けるのか。私は負けると思われているのだが。でも生きている限り、望みは捨てないで、課題にチャレンジしていくつもりである。